

戦略的創造研究推進事業（社会技術研究開発）

平成28年度 実装活動報告書

実装支援プログラム（成果統合型）

実装プロジェクト

「高齢社会課題解決に向けた共創拠点の構築」

実装代表者氏名 辻 哲夫

（英語表記）

Tetsuo Tsuji

所属 役職 東京大学 高齢社会総合研究機構 特任教授

（英語表記）

Professor, The Institute of Gerontology / The University of Tokyo

目次

1. 実装プロジェクト名.....	2
2. 実装活動の要約.....	2
2 - 1. 実装活動の達成目標.....	2
2 - 2. 実施項目・内容.....	2
2 - 3. 主な結果.....	2
3. 実装活動の具体的内容.....	3
3 - 1. 実装活動の達成目標.....	3
3 - 2. 実施方法・実施内容.....	5
3 - 3. 実装活動の結果・成果.....	6
3 - 4. 会議等の活動.....	13
4. 実装活動実施体制.....	16
5. 実装活動実施者.....	17
6. 実装活動成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など.....	20
6 - 1. ワークショップ等.....	20
6 - 2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など.....	21
6 - 3. 論文発表.....	21
6 - 4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）.....	21
6 - 5. 新聞報道・投稿、受賞等.....	21
6 - 6. 知財出願.....	21

1. 実装プロジェクト名

実装プロジェクト名：「高齢社会課題解決に向けた共創拠点の構築」
(Redesigning communities for aged society)

実装代表者：辻 哲夫（東京大学 高齢社会総合研究機構 特任教授）

実装活動期間：平成28年7月1日から平成31年3月31日まで

2. 実装活動の要約

2 - 1. 実装活動の達成目標

本実装プロジェクトでは、各種社会技術の俯瞰的な体系化と、それらの利活用を担う人材育成およびネットワーク化を通して、活力と魅力ある高齢社会を共創する拠点機能の確立を目指す。プロジェクト終了時のマイルストーンは以下の3つとなる。

- (1) 千葉県柏市等の実践コミュニティでの社会技術の発展・統合を図る実践活動
- (2) 共創プラットフォーム活動における理論的な活動
①人材育成、支援/②情報共有プラットフォーム/③社会技術・地域協働の体系化
- (3) 継続的な共創活動を支援する法人への継承

2 - 2. 実施項目・内容

- (1) モデルとなる実践コミュニティの構築(柏市) ① 豊四季台、② 布施新町(富勢)
- (2) 人材育成プログラム作成に向けた検討
- (3) 情報共有プラットフォームの段階的構築および実装
- (4) 社会技術の体系化、価値の提言に向けた活動
- (5) 継続的な共創活動を支援する法人の設立に向けた準備

2 - 3. 主な結果

- (1) ① 政策連携型として、柏市が推進する支え合い会議にて、関係構築を進めた。
② 地域積み上げ型に向けて布施新町みらいプロジェクトを立ち上げ、福岡のおたがいさまコミュニティを基盤とした企画をもとに、関係構築を進めた。
- (2) 共創まちづくり人材検討部会を立ち上げ、まちづくり人材に求められる要件を抽出する共創まちづくり人材研究会の開催、他事業との連携可能性の検討、「セカンドライフ支援」に関する独自プログラムの検討を実施した。
- (3) 人間中心設計の観点から想定される利用者のイメージを描きながら、基盤となる共創情報ポータルデザインのデザインまで具体化した。
- (4) 地域協働の可視化・体系化に向けたプロジェクト深堀調査を3つのプロジェクト（歩行圏PJ、らくらく農法PJ、ICT見守りコミュニティPJ）に対して実施した。統合実装プロジェクト全体会議では、解決策としての社会技術について議論した。

3. 実装活動の具体的内容

3 - 1. 実装活動の達成目標

高齢化が進む社会で顕在化する課題は複雑な様相を呈する。そのような現実の中、これからの高齢社会は、地域の特性に応じながら、活力と魅力あるコミュニティの創出を促進することが求められる。これまで「コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」研究開発領域（以下、高齢社会領域）では、実践と科学的なエビデンスに基づきながら、参加・協働型の研究開発を推進してきた。ここで創出された各種成果を、多様な地域・課題に対応できるような形で、俯瞰的・体系的に示すことによって、社会技術の活用が各地で促進されるものと期待される。その一方で、知見を活用しながら、分野横断で協働によるコミュニティづくりを担える人材が不足している。そのため、社会技術の体系化に加えて、それらを利活用できる人材を育みながら、セクターを越えて有志を結びつけることが、これからの高齢社会のまちづくりにおいて欠かせないものとする。

上記の課題意識から、本実装プロジェクトでは、各種社会技術の俯瞰的な体系化と、それらの利活用を担う人材育成およびネットワーク化を通して、活力と魅力ある高齢社会を共創する拠点機能の確立を目指す。そこで、高齢社会領域で創出された社会技術を基盤としながら、千葉県柏市等の実践コミュニティにて展開される社会技術の発展・統合を図る実践活動と、全国的に取り組まれている解決策・協働のあり方を俯瞰的に体系化し、新しい価値の発信、政策提言等につなげる理論的な活動との両面から構成する。

このように実践コミュニティと学際的・職際的な協議体が相互に影響を与えることで、活力と魅力ある高齢社会の実現に資する「社会技術と人材の共創拠点」を目指す。以上を踏まえて、以下の3点をプロジェクト終了時のマイルストーンとする。

(1) コミュニティにおける実践を通して社会技術を発展・統合させるスキームの構築

地域で課題志向による社会技術の実装活動を進めることで、社会技術の実装・波及要件に関わる知見・ノウハウを発展・統合させるスキームを確立することを目指す。まず、これからの高齢社会を持続可能で活力ある社会とするために不可欠な社会的基盤である地域の住民が主体的に地域に関わり、自治体、地域の事業主など多彩な地域資源と協働して地域の課題を解決していく土壌づくりを目指す。ついで、こうした協働に向けた土壌の中で地域の課題を共有し、課題に応じて高齢社会領域が開発した社会技術を集約する。こうした課題解決を目指す地域住民の力と、社会技術とのマッチングにより、具体的な事業化を展開する。このような総合的なモデルコミュニティづくりを展開する地域を実践コミュニティと呼ぶこととし、試行的な実装の場として定着させる。対話・協働の土壌づくり、地域課題の特定化、社会技術とのマッチング、事業の計画と実施をワンサイクルにして活動内容を詳細に記録し、マニュアル化（ないしは既存のマニュアルの統合、改良、追加）を行う。マニュアル化と、後述の「社会技術と人材の共創拠点」が展開する研修事業を通して、異なる地域特性と地域課題を持った複数の実践コミュニティを構築する。

(1) -1. セカンドライフ支援を中心とした実践コミュニティの展開（千葉県柏市）

自治体等との協働体制、地域特性の多様性、中間支援組織の存在から、まず千葉県柏市を実践コミュニティとする。具体的なコミュニティとして、市中心部に近く大規模団

地を含む利便性の高い住宅街である地区と、農地が多くある中に新旧の住宅街を抱える地区の2地区を取り上げ、地域特性に応じた異なるアプローチ方法で地域住民が主体的に高齢化する地域の課題と向き合う土壌づくりに取り組む。

(1) -2. 実践コミュニティの拡大

高齢社会の課題に取り組む先進的な基礎自治体から新たな知見を創出する上でパートナーとなるコミュニティを探索し、協働を図れる関係性を構築する。また、産官学民協働の具体的な実践も進める。

(2) 学際・職際的協議体制を基盤とした「社会技術と人材の共創拠点」の構築

セクターを越えた協働を通して社会技術や人材を育みながら、地域での共創による取り組みを支える拠点を構築する。同時に、高齢社会領域以外で展開されている類似の研究組織、取り組みと連携を広げ、体制の強化を図る。高齢社会の課題解決に資する方策や指標等に加え、各PJが培ってきた協働に関するノウハウを整理し、課題解決に貢献する手法（コミュニティにおけるアクションリサーチ、リビングラボ等）についても多様な視点から体系化し、実践を図る。

併せて、体系化した社会技術を活用できるスキルと経験をもった人材を育み、有機的なつながりを構築することを目指す。そこで、高齢社会のまちづくりのあり方を学び合う「人材育成」と、日常的な交流を図る「情報共有プラットフォーム」といった事業を実施する。その際、人材・情報を有機的につなげることを意識し、人材育成、情報共有プラットフォーム、社会技術の体系化の3つの活動を総合的に運営・実施することによって、効率的な課題解決の波及を目指す。

(2) -1. 地域で協働・共創を推進できる人材育成プログラムの作成と実施

高齢社会の課題解決に向け、自治体関係者やまちづくりを志すステークホルダーを主対象として以下のコンセプトを盛り込んだ人材育成プログラムを作成、実施する。

- 生活者の視点から分野横断的な課題解決に向けて、セクターを越えた協働・共創によるまちづくりを総合的にマネジメントできる人材の育成
- 分野横断的な老年学の知識、気づき、協働のスキル、経験の共有
- 複合的な高齢社会課題に柔軟に対応できるよう対等に学び合うネットワーク構築

(2) -2. 「情報共有プラットフォーム」の構築、運営

高齢社会領域の成果を基盤としながら、課題解決に資する情報を集約・発信するとともに、研修等で築かれた関係性を強化する日常的な質の高い交流を促すために、以下の要件を備えたプラットフォームをオンライン上に構築する。

- 高齢社会領域作成の情報整理用フォーマットを基盤とした情報発信アーカイブ
- 関係者間の継続的で自由な交流を促す機能・システム

(3) 多様なステークホルダーの継続的な共創活動を支援する法人の設立

以上の活動を円滑に推進し、共創拠点機能の担い手として、「高齢社会共創センター」を立ち上げる。各組織から独立した法人格を獲得することで、柔軟な活動を担保することを旨とする。

3 - 2. 実施方法・実施内容

(1) モデルとなる実践コミュニティの構築（柏市）

特徴の異なる2つの地域において、「地域の諸課題に取り組む住民主体の協働の場」の創出を目指した。

- ① 豊四季台地域：政策連携型
- ② 布施新町（富勢地域）：地域積み上げ型

(2) 人材育成プログラム作成に向けた検討

具体的なプログラムを組む準備として、共創まちづくり人材検討部会を立ち上げ、以下の3点を実施した。

- ① 共創まちづくり人材研究会（まちづくり人材に求められる要件の具体化）
- ② 他事業との連携に向けた意見交換
- ③ 独自プログラムに関する検討

(3) 情報共有プラットフォームの段階的構築および実装

情報共有プラットフォームの具体化を図る上で、想定される利用者像、および利用プロセスの明確化し、基本構造のデザインを構築した。

(4) 社会技術の体系化、価値の提言に向けた活動

高齢社会領域が蓄積してきたプロジェクト成果を有効に活用できるよう、以下の3点を実施した。

- ① 地域協働の可視化・体系化に向けたプロジェクト深堀調査
- ② 統合実装プロジェクト全体会議（解決策としての社会技術について議論）
- ③ 韓国事例(ボトムアップ型活動)への視察および意見交換

(5) 継続的な共創活動を支援する法人の設立に向けた準備

プロジェクト終了後も見据えて、円滑に活動を継続できる形態を整えるために、一般社団法人の立ち上げに向けた準備を進めた。

3 - 3. 実装活動の結果・成果

(1) モデルとなる実践コミュニティの構築（柏市）

柏市の実践コミュニティでは、特徴の異なる2つの地域を取り上げ、活動を展開した(図2)。いずれの取り組みも、「地域の諸課題に取り組む住民主体の協働の場」の創出が要である点は共通しているが、アプローチの面で「国の政策を入口」にする豊四季台地域(政策連携型)と、入口自体から住民主体で掘り起こす土台づくりから手掛ける布施新町(地域積み上げ型)とで、異なる形式を試みることにした。

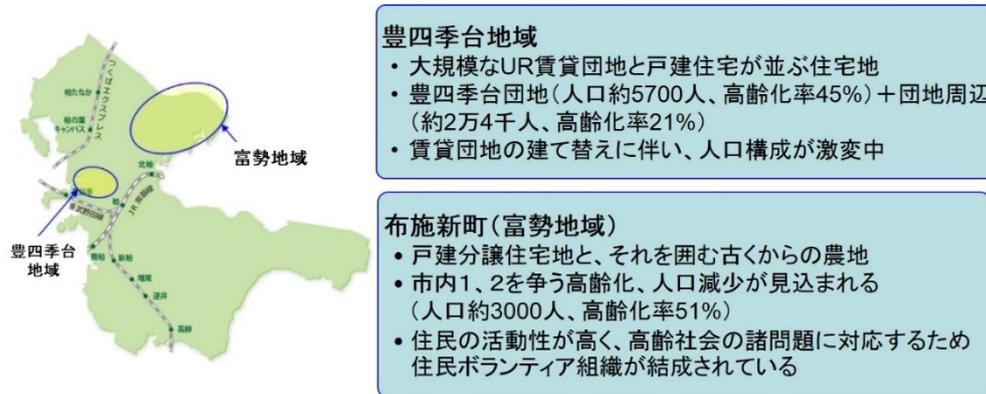


図2. 柏市で対象とした2地域の特徴

① 豊四季台地域：政策連携型

豊四季台地域は、生きがい就労等、高齢社会領域としてもプロジェクトを取り組んできた地域である。豊四季台では、国の政策である「地域支え合い」を入口にした安心して暮らせるコミュニティづくりの統合実装モデル構築を試みている。そこで、柏市として進めている「地域支え合い会議(図3)」と連動させながら、展開することにした。

関係者ヒアリングを通したメンバーの拡大を進めながら、地域活動への参加を広げるためのアイデアについて意見交換を図り、地域の意見を集めるきっかけとなるようなイベントを企画・実施することにした。高齢住民の地域活動(交流、生涯学習、健康づくり等)の調査と支援も合わせて進め、地域資源についてのグループワークもを行い、イベントへの道筋を検討した。

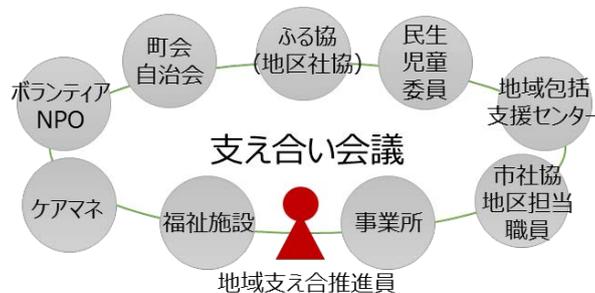


図3. 支え合い会議の構成イメージ（柏市ではコミュニティ圏域での設置を想定）

② 布施新町（富勢地域）：地域積み上げ型

おたがいさまコミュニティ形成技術の手法（小川全PJ）を取り入れ、地域課題（あったらいいな）から、住民が自分ごととして地域を考える「みらい会議」を入り口に、世代循環するまちづくりの統合実装モデル構築を試みている。

7月のプロジェクト開始から、コアとなる住民メンバー、柏市、柏市社協との関係づくりを進め、おたがいさまコミュニティの紹介や意見交換を行った。9月には、福岡のおたがいさまコミュニティメンバーが布施新町に赴き、おたがいさまコミュニティ模擬ワークショップを開催するなど、相互理解を深める機会を設けた(図4)。11月には「布施新町みらいプロジェクト」として本格的な活動を開始した。

12月は、おたがいさまコミュニティにおける地域コーディネーターの考え方に沿って、キーパーソンヒアリングを重ね、丹念に地域の様子、声、人のつながりを追った。同時に、幅広い声を聞きとるために、3月に全戸住民(中学生以上)に対するアンケート調査も実施した。これはベースライン調査としても位置付けている。

また、同時に、具体的な活動アイデア(あったらいいな)を共創しながら、仲間づくりを目指したおたがいさまワークショップ形式による「布施新町みらいの語り場」を企画し、第1回を3月31日に開催した(第2回は4月16日開催予定)。



図4. おたがいさまコミュニティお試しワークショップ

いずれの地域も、引き続き、「地域の諸課題に取り組む住民主体の協働の場」を丁寧に構築しながら、高齢社会領域15プロジェクトで創出した社会技術のどの部分が如何にマッチング可能であるか、継続的に検討していく予定である。

(2) 人材育成プログラム作成に向けた検討

平成28年度は、共創まちづくり人材検討部会(リーダー：袖井孝子)を立ち上げ、共創・協働によるまちづくりを先導する人材・チーム像の明確化を目的とした「共創まちづくり人材研究会」の企画・開催、および主に自治体関係者向けの研修プログラムに向けた事前検討を行った。検討部会メンバーには、以下のようにマルチステークホルダー体制をとるようにした。

岩田 三代	元 日本経済新聞社 論説委員 兼 生活情報部編集委員
木村 清一	東京大学 高齢社会総合研究機構 客員研究員 元柏市保健福祉部長
白木 里恵子	早稲田大学 理工学術院 創造理工学部 助教 (まちづくり)
袖井 孝子 ◎	お茶の水女子大学 名誉教授 家族社会学
永沢 映	NPO法人 コミュニティビジネスサポートセンター理事長
野藤 悠	ヘルスプロモーション研究センター 研究員 (公衆衛生)

(五十音順、◎リーダー)

① 共創まちづくり人材研究会

共創まちづくり人材研究会は計3回開催し、理論と実践の両面を意識しながら、マルチステークホルダーによる議論を行った。28年度の研究会では、コミュニティにおける地域協働を基盤に活動を進める基礎自治体職員を招き、地域協働を先導する人材像に迫った(図5)。

第1回研究会では、「高齢社会のコミュニティを育む地域協働のあり方」をテーマに議論した。まず、らくらく農法PJ(寺岡PJ)の実施者でもあった下市町地域づくり推進課の松原正城氏を招き、らくらく農法PJでの協働および元気印集落事業に関して紹介いただいた。元気印集落事業は、PJで開発したらくらく式集落点検法を基盤に地域での対話を重視した事業である。続いて、萩原なつ子氏(立教大学 社会学部教授 非営利組織論)から、学問的な立場からコメントをいただいた。最後に、袖井孝子氏司会による鼎談形式で、これまでの行政スタイルと異なる「寄り添う形での新たな支援」のあり方を中心に、議論がなされた。

第2回研究会では、川崎市市民文化局 の山口弘氏を招き、「庁内横断型チームの可能性」について議論した。山口氏から、若手職員を対象として多部局混合で現場実践を強く意識した総合職員研修(ピープルデザインゼミ)を紹介いただいた。次いで検討部会メンバー木村氏からコメントをもらい、鼎談に移った。主に部局横断の活動を進める上で、「如何に部局・立場を越えた仲間づくりを展開するか」について議論がなされた。最後に、具体的に人材像に迫る上で意見出しを行った(図6)。

第3回研究会では、高齢社会領域のメンバーを交え、「地域協働・共創に向けたチームづくり」に関して、議論を行った。第2回が主に自治体内部での仲間づくりがメインとなったことに対し、第3回では、マルチステークホルダーの立場から、それぞれの組織内外で如何にチーム・仲間を育んでいくことができるかについて、議論した。その際、自己紹介を兼ねた自己分析シート(役割、思い・心構え、将来ビジョン、強み・スキル)を試作し、活用した。

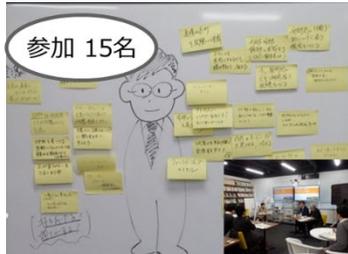
全体を通して、テーマに寄らず、共通するポイントとして、地域協働のコーディネーターとしての役割、そのために持つべき心構え、それを実践するためのスキルといった枠組みで集約できる可能性が見えてきた。平成29年度中に、これらをまとめ、実践的な人材像・チーム像の提示、および地域協働に資するツールの作成を実施する予定としている。



参加 17名

第1回 2016年11月28日
高齢社会のコミュニティを育む
地域協働のあり方

- ・ 松原 正城氏 - 寺岡PJ
(下市町地域づくり推進課)
- ・ 萩原 なつ子氏
(立教大学 等 非営利組織論)



参加 15名

第2回 2017年2月17日
庁内横断型チームの可能性
- 多部署を交え、現場に出かけ、
実践を意識した職場集合

- ・ 山口 弘氏
(川崎市 市民文化局)
- ・ 木村 清一氏 - 領域AD
(東大IOG 元市職員)



参加 28名

第3回 2017年3月25日
地域協働・共創に向けたチームづくり

- ・ 松原 正城氏 - 寺岡PJ
(下市町地域づくり推進課)
- ・ 齋藤 昭彦氏 - 小川晃PJ
(若手県立大学、元市・県職員)
- ・ 原口 尚子氏 - 小川全PJ
(九州経済調査協会)
- ・ 田中 紀之氏 - 統合実装PJ
(東大IOG、企業から出向)

図5. 共創まちづくり人材研究会の風景とメンバーリスト



図6. 第2回共創まちづくり人材研究会での意見出し結果

以上のように、まちづくりを先導する人材に求められる要件に迫りながら、テーマ型のプログラムに関する検討も進めた。まず、他事業との連携を視野に、厚生労働省老人保健健康増進等事業で先行して検討がなされていた人材育成・研修関連事業から、本実装プロジェクト実施者が関与する事業実施者との交流を図ってきた。この中で、研究事業として創出するアウトプットとしての「研修プログラム」の更新メンテナンス、マネジメントなど受け皿として、共創プラットフォームへの継承可能性の検討を進めることができた。

一方で、独自プログラムの検討対象として、セカンドライフ支援(アクティブシニアが活躍できるコンテンツ・環境づくり)に焦点を絞ることにした。これは、平成28年度から厚生労働省による「生涯現役促進地域連携事業」が始まり、国の政策とも連動する形が取れるものと考えたためである。

以上の活動をもとに、平成29年度は「他事業との連携」「独自プログラムの検討、具体化」を進めていく予定としている。

(3) 情報共有プラットフォームの段階的構築および実装

平成28年度は、本質が伝わる情報共有機能を見定める上で、人間中心設計による情報デザイン設計を行った。具体的には、まちづくりを志して本機能を必要とする想定利用者像（ペルソナ）および利用者像に合わせた利用プロセス(カスタマージャーニー)を描いた。また、らくらく農法PJへの深堀調査に人間中心設計専門家にも同行してもらい、プロジェクト関係者の声を拾いながら、多様な入口設計の必要性を確認した。これらの検討を踏まえ、情報共有の基礎構造として、以下のような共創情報ポータルを設計した(図7)。

共創情報ポータルでは、想定利用者の習熟度に応じて、4つの入り口を作成した。まず、地図上で感覚的に取り組みに触れる「見る・知る」、キーワードで簡易検索する「調べる」、同じ志を持った人と交流する「つながる」、より具体的な目的を持って社会技術を探れる「役立つ」と、なっている。これらは基礎構造として位置づけられ、具体的な機能については、実際の利用者の声を反映しながら、平成29年度以降に拡張・改善プロセスを進めていく予定としている。

また、深堀調査と連動しながら検討を進める中で、これからのコミュニティづくり事例や、創出された社会技術を提示するに際しては、ビジョン・プロセスと適切に繋ぎながら提示することの重要性を認識した。これらコミュニティづくりの情報の伝え方については、引き続き、社会技術・地域協働の体系化の動きと絡めながら、検討を続けていく。



図7. 共創情報ポータルの基礎構造

(4) 社会技術の体系化、価値の提言に向けた活動

(4-1) 地域協働の可視化・体系化に向けたプロジェクト深堀調査

地域協働の可視化フレーム作成および体系化の検討に向けて、基盤情報を得る上で、3プロジェクトへの深堀調査を実施した。対象としたプロジェクトは、産官学民協働による事例として、歩行圏コミュニティPJ(中林PJ)、らくらく農法PJ(寺岡PJ)、ICT見守りコミュニティPJ(小川晃PJ)を先行して取り上げた(図8)。

現地コミュニティに出向いた上で、産官学民の研究関係者(実施者/協力者)を対象にして、個別インタビュー、グループインタビュー、ディスカッションを行った。その様子は、映像でも納めている。インタビュー内容としては、プロジェクト実施当時から将来の展望まで、幅広く聞き取った。

調査に当たっては、表1のような手順で行っている。これらのプロセス自体を、今後の各地での深堀調査、可視化フレームのプロトタイプとして位置づけている。



図8. 3プロジェクトへの深堀調査の様子

表1. 深堀調査プロセス/平成28年度

(1)	調査依頼、調査スケジュールを調整 ・マルチステークホルダーに対して、アポイントメント
(2)	深堀調査チームで事前打合せ ・ステークホルダーごとに役割の確認 ・事業期間内の情報整理用フォーマット、報告書、HP等情報の時系列整理 ・仮説シナリオの作成、不明点の抽出、個別聞き取り項目の検討 ・ヒアリング対象、事項の精査 (地域の変化、心情の変化、終了後の展開、将来展望等)
(3)	調査の実施 ・研究代表者から研究概要の説明 ・個別インタビューまたはグループインタビュー - プロジェクト全体への関わり方、印象、感想の聞き取り - 個別に事前検討した聞き取り項目 ・コミュニティにおける要素技術の利用状況調査 ・研究代表者に仮説シナリオを提示して意見交換

本深掘調査を通して、第3者的な立場から取り組みを聞き取ることの意義、コミュニティづくりを通じた「関係者のつながりの多様化」、「要素技術の役割の変化」等の地域協働によるコミュニティづくりの要となるポイントが浮き彫りになり、仮説が徐々に精査されてきている。そこで、平成29年度は、3プロジェクトの深掘調査結果をもとに、地域協働によるコミュニティづくりの共通部分を括り出しながら、地域協働のあり方を可視化するためのフレームの検討、および「地域協働そのものの体系化」の具体化を進める。

（4-2）統合実装プロジェクト全体会議の開催

これまで培ってきた高齢社会領域のマルチステークホルダーのネットワークを強化しながら、高齢社会における課題解決策としての社会技術について議論を深めるために、統合実装プロジェクト全体会議を開催した(図9)。高齢社会領域の各プロジェクトおよび本実装プロジェクトの進捗状況を共有しながら、実践コミュニティでの今後の展望、高齢社会の共創まちづくりのこれまでとこれから（社会技術マップ）に関する検討も行った。続けて、第3回共創まちづくり人材研究会を開催するなど、「多様な観点」から「多様なステークホルダー」による検討と交流が図れるように仕掛けることができた。



図9. 統合実装プロジェクト会議の様子

（5）継続的な共創活動を支援する法人の設立に向けた準備

継続的な活動の基盤としての法人立ち上げに向けた検討を進めた。実現性の高い自立運営モデルとするには、多様なコンテンツが求められるものと考え、一般社団法人 高齢社会検定協会 を改組する形とした。また、JST-SICORPにて「活力ある高齢社会の実現に向けた『国際連携型リビング・ラボ』の創設」プロジェクトが採択され、リビングラボ事業もコンテンツの一つとして想定している。

3 - 4. 会議等の活動

○柏実践－豊四季台地域

年月日	名称	場所	概要
H28.10.17	豊四季台地域WG (1)	東京大学701会議室	<ul style="list-style-type: none"> ・ 柏市社協より豊四季台地域のヒアリング結果の報告。 ・ 今後の取り組みとして、イベント開催に向けたコアメンバー会議を企画。
H28.11.21	豊四季台地域WG (2)	柏市役所別館第5会議室	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第3回豊四季台地域支えあい会議に向けて、配布資料・メンバーリスト・席順・タイムスケジュール・シナリオについて確認。
H28.11.29	第3回豊四季台地域支えあい会議	柏地域医療連携センター	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域活動への参加を広げるためのアイデアについて意見交換。 ・ 新しいイベントの開催を合意。
H28.12.19	豊四季台地域WG (3)	東京大学701会議室	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第3回豊四季台地域支えあい会議の実施報告。 ・ イベント開催に向けて意見交換。 ・ イベント以降の取り組み議論。
H29.1.18	第1回豊四季台地域ささえ愛実行委員会	柏地域医療連携センター	<ul style="list-style-type: none"> ・ 事務局より会議の趣旨説明。 ・ イベントの目的および内容について意見交換。
H29.2.10	第2回豊四季台地域ささえ愛実行委員会	柏地域医療連携センター	<ul style="list-style-type: none"> ・ イベント次第を決定。 ・ イベント開催日および場所の候補を検討。
H29.2.20	豊四季台地域WG (4)	柏市役所別館第5会議室	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第1回および第2回実行委員会についての実施報告。 ・ 今後の計画（全国へ横展開できるプログラム、民間の活用等）について意見交換。
H29.3.15	第3回豊四季台地域ささえ愛実行委員会	柏地域医療連携センター	<ul style="list-style-type: none"> ・ イベント開催場所を決定。 ・ フレイルサポーターによるフレイルチェックを企画。 ・ 実行委員会に部会を設置。 ・ 地域事業者との連携について意見交換。
H29.3.21	豊四季台地域WG (5)	柏市役所別館第1会議室	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第3回実行委員会についての実施報告。 ・ 実行委員会の役割分担およびイベント構成について意見交換。
H29.3.24	第4回豊四季台地域支えあい会議	柏地域医療連携センター	<ul style="list-style-type: none"> ・ イベント開催に向けての進捗状況の報告。 ・ 地域資源についてのグループワークお

			よび発表。
--	--	--	-------

○柏実践－布施新町（富勢地域）

年月日	名称	場所	概要
H28.7.13	布施新町WG (1)	東京大学 柏キャンパス 第二総合研究棟	<ul style="list-style-type: none"> ・統合実装プロジェクトの布施新町での計画と今年度の活動計画 ・福岡小川全PJの手法の、布施新町での活用について
H28.8.8	布施新町WG (2)	東京大学 柏キャンパス 第二総合研究棟	<ul style="list-style-type: none"> ・福岡小川全PJチームとの顔合わせ(TV会議中継) ・「おたがいさまコミュニティ」手法の説明、布施新町での展開方法について
H28年8.10	柏市社協と東京大学IOG打ち合わせ	柏市社協 ボランティアセンター会議室	・布施新町での活動における市社協の関わりについて
H28.9.12	布施新町WG (3)	東京大学 柏キャンパス 第二総合研究棟	・福岡小川全PJチームの柏布施新町訪問、住民メンバー他へのヒアリング、「おたがいさまコミュニティ」展開の活用について
H28.9.13	小川全PJ:おたがいさまコミュニティワークショップ体験会	東京大学 柏キャンパス 第二総合研究棟	・東大IOG、一社SLF、柏市市、柏市社協、布施新町地域住民によるワークショップの体験会
H28.10.3	小川全PJチームと東大IOGの打ち合わせ	東京大学本郷キャンパス、九経調 :skype会議	<ul style="list-style-type: none"> ・今後のプロジェクトの進め方について ・地域ヒアリングの実施について
H28.10.11	布施新町WG (4)	東京大学 柏キャンパス 第二総合研究棟	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークショップ体験の振り返り ・本年度の活動計画の見直し ・地域ヒアリングと住民アンケートの実施について検討
H28.11.10	柏市社協と東京大学IOG打ち合わせ	柏市社協 ボランティアセンター会議室	・地域ヒアリング等の実施における市社協との分担について検討
H28.11.15	布施新町住民との打ち合わせ	東京大学 柏キャンパス 第二総合研究棟	<ul style="list-style-type: none"> ・「みらいプロジェクト」の発足について ・今後の体制、会議運営について
同日	布施新町WG (5)	東京大学 柏キャンパス 第二総合研究棟	<ul style="list-style-type: none"> ・「みらいプロジェクト」の発足と「みらい会議」の開催について ・今年度末までの活動計画 ・地域ヒアリングの実施について

H28年12月9日	地域ヒアリング検討会	柏市社協会議室	<ul style="list-style-type: none"> 地域ヒアリングの途中経過と、振り返り、分析 今後のヒアリング実施計画について
H28年12月12日	布施新町みらい会議(1)&布施新町WG(6)	東京大学 柏キャンパス 第二総合研究棟	<ul style="list-style-type: none"> 地域ヒアリングの進捗について 地域住民向けアンケート計画について おたがいさまワークショップについて
H29年1月30日	布施新町みらい会議(2)&布施新町WG(7)	東京大学 柏キャンパス 第二総合研究棟	<ul style="list-style-type: none"> 地域ヒアリングの報告 地域住民向けアンケートの実施について ワークショップの実施計画
H29年2月3日	小川全PJチームと東大IOGの打ち合わせ	東京大学本郷キャンパス、九経調 :skype会議	<ul style="list-style-type: none"> 地域ヒアリングの実施報告、分析結果の検討 ワークショップの計画について
H29年2月13日	布施新町みらい会議(3)&布施新町WG(8)	東京大学 柏キャンパス 第二総合研究棟	<ul style="list-style-type: none"> 地域住民向けアンケート実施準備 ワークショップ「みらいの語り場」の実施予定について
H29年3月7日	小川全PJチームと東大IOGの打ち合わせ	東京大学本郷キャンパス、九経調 :skype会議	<ul style="list-style-type: none"> ワークショップの実施について、運営について
H29年3月13日	布施新町みらい会議(4)&布施新町WG(9)	東京大学柏キャンパス 第二総合研究棟	<ul style="list-style-type: none"> 地域住民向けアンケートの実施中間報告 ワークショップ「みらいの語り場」の実施計画、準備について
H29年3月31日	布施新町みらいの語り場(ワークショップ)	布施新町ふるさとセンター	<ul style="list-style-type: none"> 地域住民を対象としたワークショップ第1弾(第1回) 小川全PJメンバーによるおたがいさまコミュニティワークショップ手法の柏での実践

4. 実装活動実施体制

(1) 総括グループ（グループリーダー 辻 哲夫）

東京大学 高齢社会総合研究機構

実施項目：本実装PJにおける全体運営マネジメント

役割：学術的な議論と実践に基づく知見を同時並行で運営する上で、両グループが適切に交流を図る上で、両者の調整を図り、計画策定と進捗管理を担う。

(2) コミュニティ実践運営グループ（グループリーダー 菅原 育子）

東京大学 高齢社会総合研究機構

実施項目（1）：モデルとなる実践コミュニティの構築

役割：実践コミュニティ(柏市)にて、小地域の課題を把握すると同時に高齢社会領域にて開発された社会技術を活用しながら、地域協働の課題解決を推進し、「いきいき・元気に・いつまでも安心して」暮らせるモデルコミュニティの構築を目指す。このプロセスを通して、社会技術を発展・統合させるスキームを構築する。また、実装ノウハウ、波及要件の明確化につながる情報を記録し、高齢社会共創グループと共有する。

(3) 高齢社会共創グループ（グループリーダー 佐藤 滋）

東京大学 高齢社会総合研究機構

実施項目（2）：人材育成プログラムの試行、改善

役割：前年度立ち上げた共創まちづくり人材検討部会を基盤に、セカンドライフ支援プログラムの作成・試行・改善、既存のプログラム・研究開発との協働可能性等の検討、他テーマの検討を継続的に実施する。

実施項目（3）：情報共有PFの段階的構築および実装

役割：前年度企画・構築した情報発信機能を実装しながら、情報整理手法を確立し、新たな情報の収集、および情報の構造化を図る。同時に、WEB利用者の交流機能の具体化を進め、今年度内に試行的構築・改善を実施する。

実施項目（4-1）：セクターを越えた対話の場の創出

役割：統合実装プロジェクト全体会議、公開型フォーラム等の対話の場を設け、新たな価値の形成・発信につなげる。また、協働手法に関する体系化・論理化を図る。

実施項目（4-3）：新たな価値、政策提言の発信

役割：実施事項（1）、（2）、（3）、（4-1）から見出される情報、価値の発信に向けて、HP運営、交流企画等、活動を取りまとめる。

実施項目（5）：実体的なプラットフォームの構築

役割：実体を伴うネットワーク構築に向け、全国に点在するジェロントロジー、高齢社会のまちづくりに関連する組織・活動体との交流、協議を図る。

早稲田大学 理工学術院

実施項目（4-2）：社会技術の可視化フレーム作成と、応用手法の検討

役割：社会技術の開発・実装プロセスの可視化、社会技術の広がり方のモデル化に関するフレーム(プロトタイプ)を活用して、他地域への深堀調査を実施し、プロセスを可視化する。また、フィードバック等を通して、継続的に検討、改善を図る。活用可能性を視野に入れながら、深堀調査で蓄積した映像データの編集について方向性を検討し、今年度内に編集に着手する。

5. 実装活動実施者

(1) 総括グループ

氏名	フリガナ	所属機関、所属部署等	役職(身分)
辻 哲夫	ツジ テツオ	東京大学 高齢社会総合研究機構	特任教授
菅原 育子	スガワラ イクコ	東京大学 高齢社会総合研究機構	特任講師
前田 展弘	マエダ ノブヒロ	東京大学 高齢社会総合研究機構	客員研究員

(2) コミュニティ実践運営グループ

氏名	フリガナ	所属機関、所属部署等	役職(身分)
菅原 育子	スガワラ イクコ	東京大学 高齢社会総合研究機構	特任教授
前田 展弘	マエダ ノブヒロ	東京大学 高齢社会総合研究機構	客員研究員
土師 真裕子	ハジ マユコ	東京大学 高齢社会総合研究機構	特任研究員
田中 紀之	タナカ ノリ ユキ	東京大学 高齢社会総合研究機構	特任研究員
神谷 哲朗	カミヤ テツロウ	東京大学 高齢社会総合研究機構	特任研究員
成嶋 正俊	ナルシマ マサトシ	柏市 保健福祉部	部長

永塚 洋一	ナガツカ ヨウイチ	柏市 保健福祉部福祉政策課	課長
稲荷田 修一	イナイダ シュウイチ	柏市 保健福祉部地域医療推進室	室長
秋山 亨克	アキヤマ タカヨシ	柏市社会福祉協議会	事務局長
山下 嘉人	ヤマシタ ヨシト	柏市社会福祉協議会	事務局次長
寺岡 伸悟	テラオカ シンゴ	奈良女子大学 文学部人文社会学科	教授
小川 全夫	オガワ タケオ	特定非営利活動法人 アジアン・エイジング・ビジネ スセンター	理事長
南 伸太郎	ミナミ シンタロウ	公益財団法人 九州経済調査協 会 調査研究部	主任研究員
原口 尚子	ハラグチ ナオコ	公益財団法人 九州経済調査協 会 調査研究部	研究員
大方 潤一郎	オオカタ ジュンイチロウ	東京大学 大学院工学系研究 科都市工学専攻	教授
後藤 純	ゴトウ ジュン	東京大学 高齢社会総合研究機構	特任講師

(3) 高齢社会共創グループ

氏名	フリガナ	所属機関、 所属部署等	役職 (身分)
佐藤 滋	サトウ シゲル	早稲田大学 理工学術院	教授
前田 展弘	マエダ ノブヒロ	東京大学 高齢社会総合研究機構	客員研究員
太田 秀樹	オオタ ヒデキ	医療法人アスミス	理事長
鈴木 隆雄	スズキ タカオ	桜美林大学 老年学総合研究所	所長
小川 晃子	オガワ アキコ	岩手県立大学 社会福祉学部	教授
中林 美奈子	ナカバヤシ ミ ナコ	富山大学大学院 医学薬学研究部	准教授
大方 潤一郎	オオカタ ジュンイチロウ	東京大学 高齢社会総合研究機構	機構長

新開 省二	シンカイ ショウジ	東京都健康長寿医療センター 研究所 社会科学系研究チーム	副所長
寺岡 伸悟	テラオカ シンゴ	奈良女子大学 文学部 人文社会学科	教授
原田 悦子	ハラダ エツコ	筑波大学 人間系 心理学域	教授
清水 哲郎	シミズ テツロウ	東京大学大学院 人文社会系研 究科 上廣死生学・応用倫理セ ンター	特任教授
成本 迅	ナルモト ジン	京都府立医科大学大学院 医学研究科 精神機能病態学	准教授
伊香賀 俊治	イカガ トシハル	慶應義塾大学 理工学部	教授
島田 裕之	シマダ ヒロユキ	国立長寿医療研究センター 老年学・社会科学研究センター 予防老年学研究部	部長
小川 全夫	オガワ タケオ	特定非営利活動法人 アジアン・エイジング・ビジネ スセンター	理事長
後藤 純	ゴトウ ジュン	東京大学 高齢社会総合研究機構	特任講師
南 伸太郎	ミナミ シンタロウ	公益財団法人 九州経済調査協会	研究主査
浅野 光行	アサノ ミツユキ	早稲田大学 理工学術院創造理工学部	名誉教授
白木 里恵子	シラキ リエコ	早稲田大学 理工学術院創造理 工学部社会文化領域	助教
菅野 圭祐	スガノ ケイスケ	早稲田大学 理工学術院創造理 工学部建築学科	助手
吉田 涼子	ヨシダ リョウコ	東京大学 高齢社会総合研究機構	学術支援専門 職員
栗田 智子	クリタ トモコ	東京大学 高齢社会総合研究機構	技術補佐員

6. 実装活動成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

6-1. ワークショップ等

年月日	名称	場所	参加人数	概要
H28 9.13	小川全PJ:おたがいさまコミュニティワークショップ体験会	東京大学 柏キャンパス 第二総合研究棟		東大IOG、一社SLF、柏市市、柏市社協、布施新町地域住民によるワークショップの体験会
H28 11.28	第1回 共創まちづくり人材研究会	東京大学 本郷 キャンパス	17名	高齢社会のコミュニティを育む地域協働のあり方 松原 正城氏 - 寺岡PJ (下市町地域づくり推進課) 萩原 なつ子氏 (立教大学等 非営利組織論)
H29 2.17	第2回 共創まちづくり人材研究会	東京大学 本郷 キャンパス	15名	庁内横断型チームの可能性 多部局を交え、現場に出かけ、実践意識した職場研修 山口 弘氏 (川崎市 市民文化局) 木村 清一氏 - 領域AD (東大IOG 元市職員)
H29 3.24	統合実装プロジェクト全体会議	JST東京本部 別館		高齢社会領域の関与者ネットワークを活用したプロジェクト会議
H29 3.25	第3回 共創まちづくり人材研究会	JST東京本部 別館	28名	地域協働・共創に向けたチームづくり 松原 正城氏 - 寺岡PJ (下市町地域づくり推進課) 齋藤 昭彦氏 - 小川晃PJ (岩手県立大学、元市・県職員) 原口 尚子氏 - 小川全PJ (九州経済調査協会) 田中 紀之氏 - 統合実装PJ (東大IOG、企業から出向)
H29 3.31	布施新町みらいの語り場	布施新町ふるさとセンター	33名	地域住民を対象としたワークショップ第1弾。小川全PJメンバーによるおたがいさまコミュニティワークショップ手法を柏で実践

6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

特になし

6-3. 論文発表

特になし

6-4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）

特になし

6-5. 新聞報道・投稿、受賞等

特になし

6-6. 知財出願

特になし